

2021. 12. 5 (日) マタイ27:62~66

27:62 明るる日、すなわち、備え日の翌日、祭司長たちとパリサイ人たちはピラトのところに集まって、

27:63 こう言った。「閣下。人を惑わすあの男がまだ生きていたとき、『わたしは三日後によみがえる』と言っていたのを、私たちは思い出しました。

27:64 ですから、三日目まで墓の番をするように命じてください。そうでないと弟子たちが来て、彼を盗み出し、『死人の中からよみがえった』と民に言うかもしれません。そうになると、この惑わしのほうが、前の惑わしよりもひどいものになります。」

27:65 ピラトは彼らに言った。「番兵を出してやろう。行って、できるだけしっかりと番をするがよい。」

27:66 そこで彼らは行って番兵たちとともに石に封印をし、墓の番をした。

#### <説教>

前回は、私たちの罪のために十字架で死なれたイエスの遺体を、アリマタヤのヨセフが自分の手で取り下ろし、きれいな亜麻布に包み、自分の墓に埋葬したことを見ました。

そのことを許可したローマ総督ピラトのこと、またイエスの死と埋葬の様子を見ていたマグダラのマリヤほかの女性たちのことも見ました。

こうしてイエスは十字架上で人間として本当に死なれたことが確認されたのでした。

しかしイエスは、ご自分が祭司長たち律法学者たちから苦しみを受け十字架で殺されるが三日目によみがえるということをすでに弟子たちに話しておられました。(16:21. 17:23. 20:19)

ですから、墓に納められたイエスのからだは墓の中で確かに来たるべきよみがえりに備えていたのです。

しかし先にイエスから直接よみがえりのことを聞かされていた弟子たちはイエスのよみがえりを信じることができず、そんな望みなど持つこともできずに逃げ去っていました。

むしろ三日目のよみがえりの予告に敏感に反応し、対応したのは、イエスの敵である〈祭司長たちとパリサイ人たち〉でした。

27:62 明るる日、すなわち、備え日の翌日、祭司長たちとパリサイ人たちはピラトのところに集まって、

27:63 こう言った。「閣下。人を惑わすあの男がまだ生きていたとき、『わたしは三日後によみがえる』と言っていたのを、私たちは思い出しました。

27:64 ですから、三日目まで墓の番をするように命じてください。そうでないと弟子たちが来て、彼を盗み出し、『死人の中からよみがえった』と民に言うかもしれません。そうになると、この惑わしのほうが、前の惑わしよりもひどいものになります。」

彼らもイエスのよみがえりを本気では信じてはいなかったかもしれませんが(殊に〈祭司長たち〉であるサドカイ人は死者のよみがえりそのものを否定していました)。

彼らは〈弟子たちが来て、彼を盗み出し、『死人の中からよみがえった』と民に言う〉ことを心配しました。

彼らは、イエスが生前に病人を癒やし、悪霊を追い出し、死人をもよみがえらせるなど

の奇跡を行い、ご自分が神の子、約束のキリスト（メシヤ）、ユダヤ人の王であることをお示しになっていたことを民衆に対する〈感わし〉としてイエスを迫害し、そしてピラトに訴え、イエスを殺すことにまんまと成功したのです。

ですからここでイエスが言っていたとおりによみがえって墓から出て行った、それが証拠に墓は空っぽだ、イエスはやはり王キリストだなどと弟子たちが教えて、それを民衆が信じるようなことは〈前の感わしよりもひどい〉〈感わし〉であり、そんなことになってはならなかったのです。

かつてイエスがこの世に人としてお生まれになったときには、預言者の言葉を覚えていてヘロデ王に答えた祭司長たち律法学者たちでしたが彼らはただそれだけで、その後何もしません（イエスに会いに行こうともせず、拝みに行こうともせず）でした。

そうやって彼らは地上にお生まれになったイエスを侮辱し、イエスに逆らったのです。

そしてここでは、〈『わたしは三日後によみがえる』と言っていた〉イエスの言葉を彼らは覚えていたのですが、それゆえイエスのよみがえりを（イエスがよみがえったと弟子たちが言うのを）妨害しようと、今度は速やかに行動したのです。

そうやって彼らは地上でのイエスの死においてもイエスを侮辱し、イエスに逆らったのです（結局、イエスの全生涯、彼らはイエスに逆らい通したのです）。

イエスのよみがえりの話しを阻止するために行動する時間は〈備え日の翌日〉、要するに安息日の間の一日しかありませんでした。

「安息日厳守」を日頃から主張している彼らなら、〈ピラトのところに集まって〉請願、交渉し、その後で〈行って番兵たちとともに石に封印をし、墓の番を〉する(66)などということは絶対に「してはならない」ことのはずでした。

ですから彼らの「律法への熱心」とか「安息日厳守」というものがいかに形式的でいい加減なものであったがわかります。

そして同時に、彼らがイエスのよみがえりを、その知らせをいかに恐れ、不安に思っていたかもわかります。

イエスを十字架にまで追いやり殺すことができた、そのことで自分たちの目的は達成できた、もうこれで安心だ、とはなりませんでした。

いくらイエスの言葉とわざを否定しても否定しきれない、もしかしたら本当に言ったとおりによみがえるのではないか、いやいやそんなことがあるはずはない、あってはならない、そうなればこちらの逆転負けだ…。

ご自分の敵をそのように心の本音の部分では思わせる、恐れを抱かせる、それがイエスの力というものです。

その日は〈祭司長たちとパリサイ人たち〉にとって今までで一番安息できない「安息日」となったことでしょう。

それでも〈「番兵を出してやろう。行って、できるだけしっかりと番をするがよい。」〉(65)とピラトに言ってもらった彼らは、自分たちの不安、恐れにあえて蓋をしてイエスにやっぱり逆らおうとしました。

ローマ帝国軍の兵隊たちが〈番兵〉としてつき、〈石に封印を〉すれば、そうやって公権力の力、武力をもってすればイエスのからだを盗み出しに来る弟子たちを追い返すことはもちろん、万が一よみがえったイエスだって墓から出ることはできない、と彼らは考え

た（絶対にそうであってほしかった）のでした。

そのようにしてイエスの敵は、イエスが「よみがえりのキリスト」となること、そのように弟子たちによって説教されることを恐れ、それだけは何としても防ごうとしたのです。

しかし、すでに私たちも知っているように、イエスはご自身が語っておられたとおり、死人の中からよみがえられ、墓から出て行かれました。

それはただ神の力により、人間の助けを借りずに、同時に神の力により、人間の妨げを受けずに成し遂げられたのです。

「番し続けし兵の努力むなしかりき」（聖歌 172 番）、〈祭司長たちとパリサイ人たち〉が必死でやったことは全く無駄な抵抗でした。

しかもその〈番兵たち〉までもがイエスのよみがえりの証人にすらされるのです（28:4,11）。

それが生ける神の力、神の御子イエスの力であり、私たちの希望はそこにあるのです。